

留学報告書

情報文化学科 2年 山田一樹

まず、私がこの留学を実現できたのは家族をはじめ大学に関わる全ての人の協力のおかげだと思っています。このような機会を与えてくれて本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。また、この度は皆様に多大なご迷惑とご心配をおかけしたことをお詫び申し上げます。

そもそも私が中国に留学に行きたいと思った理由は二つあり、一つは中国語のレベルを向上させると同時に中国に関する知識を深めたいと思ったからです。もう一つは、人として成長したいと思ったからです。私は生まれてから 20 年間ずっと地元新潟県に住み着いて来ました。ましてや一人暮らしもしたことがなく、家事などは親に頼ってばかりいました。これではいけないと思い、家事の大変さを知る目的のひとつとして留学を選びました。ルームメイトが無精だったため、掃除に関しては一歩成長できたと認識しています。

私たち中国グループは 8 月 30 日～1 月 12 日までの約 4 ヶ月間中国の北京師範大学へ留学に行つて来ました。日本との時差は 1 時間で、日本から中国へは約 3 時間かかりました。北京空港に着くと、日本では嗅いだことのない中国独特のにおいがしたのを覚えています。空港を出ると一人の中国人とバスが出迎えてくれました。その人は陳さんといい、私たちが何か困ったことがある時にいろいろなサポートをしてくれました。北京に着くとすぐクラス分けテストが行われました。クラスには韓国人やアメリカ人、フランス人などがいました。世界中の国と地域の人と触れ合えることも留学の醍醐味なのだと実感しました。

私たちが住んでいた寮は“兰蕙公寓”というアパートで、その寮にはおしゃれなカフェや一般人が宿泊出来る部屋が数多くありました。私たちの部屋はとても広く、きれいで三ツ星ホテルのようでした。また、冷暖房設備も素晴らしく毎日快適に過ごすことができました。各階には厨房が常備されており、日本食が恋しくなってきたときは時々作って食べたりしました。寮には日本人をはじめいろいろな国籍の人がおり、とてもにぎやかでした。

食事に関しては寮付近に食堂やスーパーが数多くあり、困らなかったです。また、中国は日本より物価が安く手頃な価格で物を買うことができました。食堂での食事は非常に安く、1 食 5 元（約 100 円）出せばお腹いっぱい食べることもできました。

北京の気候は新潟と大体似ていましたが、冬季は雪がまったく降りませんでした。それは乾燥の違いが主な理由だそうです。乾燥は私が思っていたよりもひどく、朝起きると喉が痛くなったり、唇が頻繁に割れることもしょっちゅうありました。なので、うがい薬やリップクリームなどを持っていくことをお勧めします。外に出ると顔が痛くなるほど寒いので、防寒対策もしっかりした方がいいです。

北京の交通に関しては、横断歩道の仕組みに度肝を抜かれました。日本の場合、歩行者が歩道に入るのが確認できたら止まっているのが普通ですが、北京では歩行者が歩道を歩

いていても平気で通行しています。事故に合わないためにも細心の注意を払って通行してください。私は最後まで北京の歩道に慣れることは出来ませんでした。また、人込み（バスの中など）ではスリにも注意が必要です。ですが、良い面もありました。バスや電車やタクシーなどの交通機関は日本に比べてかなり安く乗ることができ、いろんなところに行くことができました。

学校での授業は主に会話・読み・聞き取りの3つがありました。授業はすべて中国語で行われ、最初のうちはまったく聞き取ることができませんでした。しかし毎日まじめに授業を受け、予習復習をやっていると少しずつ聞き取れてくるのが自分でもよくわかりました。担任の先生はとても優しく、一人一人のレベルに合わせてくれました。先生が話していることを明確に聞き取れると自分の自信にもつながり、もっと頑張ろうと思うようになりました。クラスみんなは本当に優しく接してくれ、毎日の授業がとても楽しかったです。あと、クラス会もやりました。スペイン人のクラスメイトが北京市内にあるスペイン料理を紹介し、みんなでパエリアを食べに行ったり、イスラム料理を食べに行ったりもしました。みんなと過ごした時間は本当に楽しかったですが、やはり留学前に単語や文法をもっとしっかり勉強しておくべきだったと後悔しています。その他にも日中交流、剪紙、水墨画、中国新聞の授業などいろんな面から中国の文化に触れることが出来ました。水墨画は私の趣味の一つになりました。とても楽しい授業でした。

私は万里の長城、天壇、故宮、頤和園などの世界遺産をはじめ、北京動物園、中国美術館、中国国家博物館、牛街などマイナーな観光名所にもたくさん行きました。牛街という町はイスラム教を信仰している人々が多く、中国では珍しい光景であり新鮮でした。そこには牛街礼寺という建物があり、実際にイスラム教徒の生活を拝見することもできました。総面積はさほど大きくありませんでしたが、初めて見るイスラムの建築物はとても美しく言葉になりませんでした。私は宗派がキリスト教ではないので礼拝堂の中には入ることは出来ませんでした。大変有意義な時間を過ごすことができました。そこは羊肉も有名で店のいたるところに羊肉が吊るされていました。また、中国美術館は2回行きました。ここは中国国内で最大級の規模で、約60000点のコレクションがあったそうです。館内は中国画をはじめ、油絵、彫刻、水彩など様々な手法の絵画を見ることができました。勉強で疲れ切った時、息抜きに行くのもいいかもしれません。また、“王府井”という繁華街やその他の場所では“値切り交渉”を行うことができました。一般的に中国のお土産屋や繁華街などでは元の値段が高めに設定されていて、店主との駆け引きによって値段が変わるといったようなシステムでした。北京に着たての頃は全然交渉することも出来ず、ぼったくられることもよくありました。しかし日に日に単語や会話などで話す機会が増えてくると、店主に言いたいことを伝えられることが出来るようになりました。値切り交渉は中国に留学したら是非やるべきです。自分が欲しいと思う値段まであきらめないで交渉してください。成功すると、これまで経験したことのない優越感に浸ることができます。勇気を出してチャレンジしてみてください。王府井は巨大デパートや飲食店が立ち並んで

おり、日本でいう銀座みたいなところでした。ゲテモノ料理の店やお箸専門店など変わった店がたくさんあり、とても面白かったです。

また、公共の場で困ったと感じた場所はトイレでした。中国のトイレは基本的に和式で、トイレットペーパーを流すことも出来ませんでした。それにトイレットペーパーが備え付きではなかったので、持参し忘れた日は、それはもう大変でした。日本に帰国すると、日本のトイレの清潔さや便利さを改めて再確認することができました。

食事に関しては、基本的に安くて辛くて油っぽいものが多かったです。中国を代表する辛い料理といえば麻婆豆腐。中国の麻婆豆腐は日本のとは異なり、ただ辛いだけでなく痺れるような辛さでした。でもその痺れが癖になり何回も食べに行っていました。また、本場中国の餃子も本当においしかったです。食堂に行くと大体の料理にトウガラシや山椒が入っており、私の口に合わないものも結構ありました。ですが、私は食堂で“麻辣烫”という美味しい食べ物に出会いました。それは籠の中に好きな具材を入れ（白菜、肉団子、キクラゲ、ラーメンなど）、そして5分ぐらい湯で、最後に“麻辣烫”スープをかけるというものでした。スープはとても濃厚で、日本では食べたことのない味でした。最高でした。このスープが食べられなくなるのはちょっと寂しいです。

私は万里の長城に行ったときケガをしました。友人とふざけて2、3メートルのところから落下しました。万里の長城の頂上で現地のスタッフや一緒に行った友人が駆けつけて、地上までタンカで運んでくれました。今こうして文字を打っているのも皆さんの助けがなかったら出来なかったかもしれません。本当にありがとうございました。留学中にこのような大怪我をしたのは初めてだと帰国してから何人かの人に言われました。私は本当に愚かなことをしたと深く反省しています。しかし、ケガを通じて得られることも数多くありました。まず、日本と中国の病院の対応による違いや治療法が明らかに違いました。私が通院した病院の北京第三医院は中国の中でも三本の指に入る病院だそうです。ですが、私が救急車で運ばれている最中や通院している際は日本に比べるとあまりいい印象は感じませんでした。日本のサービスの対応の素晴らしさを改めて感じることができました。治療法では、日本は手術や人工的な薬を使って病気を治すのが一般的ですが、中国では自然治癒で病気を治すというのが一般的でした。結果的に私のケガは中国の療法に適しており、しだいに良くなっていきました。ルームメイトの吉村をはじめ一緒に行った仲間や陳さんには、なんとお礼を言ったらいいのか感謝の言葉もありません。吉村、ケガしているとき弁当とか買ってきてくれたり、俺が出来ないことやってくれてありがとう。本当に助かりました。最高のルームメイトでした。一生の友人です。直接は言いにくいのでここに書きました。

最後に、留学を通じて友人ってすごく大事ななあをつくづく考えるようになりました。「真の友をもてないのはまったく惨めな孤独である。友人が無ければ世界は荒野に過ぎない」。という哲学者フランシス＝ベーコンの言う通り、真の友人を持つことは非常に大切なことだと思います。これからの将来私は数多くの人と接する機会が増えてくる中で、いか

に真の友人を作れるかが将来を左右する重要なキーポイントではないかと感じました。このようなことを感じたのは留学に行ったからだと思います。留学に行けて本当に良かったです。



